

# タイトル

身体障害と知的障害の両方をもつ成人（19歳から64歳まで）のため  
の個別的援助

## 著者

Evan Mayo-Wilson<sup>1</sup>, Paul Montgomery<sup>1</sup>, Jane A Dennis<sup>2</sup>

<sup>1</sup> The Centre for Evidence-Based Intervention, University of Oxford, Oxford, UK

<sup>2</sup> School for Policy Studies, University of Bristol, Bristol, UK

## 要約

### 背景

生産年齢（working age）にある成人が障害を負うことになる可能性は高く、その分布は西洋世界では増加している。多くの国々で、コミュニティ居住者のための個別的サポートという形の個別的援助が、ヘルスケア専門家以外の有給の援助者によって少なくとも週 20 時間提供されている。

### 目的

他の介入と比べて個別的援助が、身体障害と知的障害をもつ成人に対してもつ効果と、同援助が他者に対して与えるインパクトを評価する。

### 探索戦略

CENTRAL, MEDLINE, EMBASE, CINAHL, PsycINFO, ERIC, Dissertation Abstracts International と様々なスウェーデンの専門家データベースを含む電子データベースを 1980 年から 2005 年 6 月まで探索した。参照リストをチェックし、関連研究を位置づけるべく、345 の専門家、組織、政府機関および慈善団体にコンタクトを取った。

### 選択基準

障害のために日常生活における活動（例えば入浴や食事）の遂行や正常な活動への参加に

援助を必要とする、コミュニティ在住の永久的な身体的および知的障害をもつ 19 歳から 64 歳までの成人。参加者が研究群にあらかじめ振り分けられ、対照群のアウトカムが介入群のそれと同時に測定される、個別的援助の比較対照研究が含まれた。

## データ収集と分析

二名のレビューワによってタイトルと要約が調べられた。アウトカムに関するデータが引き出された。いかなる二つの研究も同一の比較を実施していなかったため、メタ分析のための研究統合は行われなかった。研究はバイアスの可能性を考慮して評価された。選択された研究について、結果とバイアスの潜在的源泉が提示されている。

## 結果

個別的援助と通常のケアを比較する、1012 名の参加者を含む二つの無作為抽出研究が同定された。概して個別的援助は他のサービスに比して好まれていたが、他のケアモデルを好む人々もいる。個別的援助が特定のサービス受給者にとっては何らかの利益をもち、かつケア提供者のためになる可能性がある。有料の援助はおそらくインフォーマルケアの代わりになるだろうが、代替案より政府に負担をかけるかもしれない。しかしながら、有料の援助がコストを下げるかもしれないと示唆するエビデンスもある。サービス受給者と社会にかかるトータルコストは不明である。

## 著者の結論

本分野における研究は限定的である。個別的援助は、そのサービスが実施されていない場所においては特に、費用がかかり組織化するのが困難であるが、他のサービスに比してのトータルコストは不明である。新たなプログラムを実行する際、サービス受給者は様々な形の援助（たとえば個々のユーザーによる組織化されたもの、組合を通じての組織化されたもの）に対してランダムに割り当てられうる。主唱者は様々な理由により個別的援助を支持するかもしれないが、個別的援助のどのモデルが最も効果的で効率的かを決定するためには、さらなる研究が必要であると、本レビューは示している。